

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

夢語り 実現しよう 梅の里

受賞者 農事組合法人 伊豆月ヶ瀬梅組合  
(静岡県伊豆市)

## ■ 地域の沿革と概要

伊豆市天城湯ヶ島地区は、伊豆半島のほぼ中央に位置し、東～南～西は天城連山が屏風状に取り囲み、東西12km、南北13km、総面積135.14km<sup>2</sup>の地区のうち9割を山林原野が占めている。天城山を水源とする狩野川が下流域で田方平野を形成し、駿河湾へ注いでいる。恵まれた自然環境を生かして狩野川やその支流沿いには、清水を利用した山葵田や天城温泉郷が開かれ、明治時代以降多くの文人墨客に愛され、川端康成、若山牧水、井上靖の作品の舞台にもなり、毎年多くの観光客が訪れる。

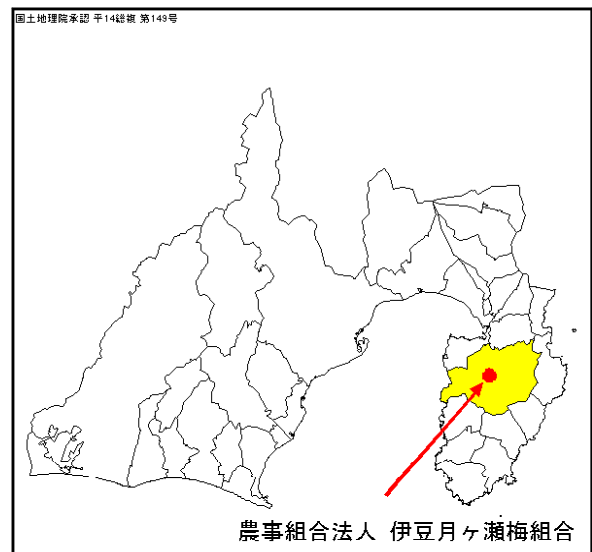
この地域の基幹産業である、わさび、しいたけの栽培は、昭和初期から始まり、現在に至るまで脈々と受け継がれている。

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

月ヶ瀬区は、天城湯ヶ島地区の北端に位置し、伊豆月ヶ瀬梅林（以下「梅林」という。）は、月ヶ瀬区の集落から西側の山に1.5kmほど入った、天城連山を真正面に見据える地にある。6.2haに及ぶ梅林は、地区所有の林地を、昭和44年の農業構造改善事業により造成し、現在は「農事組合法人伊豆月ヶ瀬梅組合」（以下、「梅組合」という。）が所有、管理している。

第1図 位置図



第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	大字単位の集団等
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	15.1% 総世帯数 205戸 総農家数 31戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 2戸 1種兼業農家 0戸 2種兼業農家 4戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 149ha 耕地面積 8ha 田 1ha 畑 7ha 耕地率 5.6% 農家一戸当たり耕地面積 0.3ha

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

#### ア 月ヶ瀬区の命運を握って

月ヶ瀬区は、総戸数150余りの中山間地域集落で、少子高齢化が進み、働き手はこの地を離れ、遊休農地は増加し、ふるさとの景観も変わり、住民の活気も感じられない状況であった。地域の商店は成り立たず、わずかに日用品を売る店と観光客向けのお菓子を売る店の2軒のみと、このままでは地域での生活が成り立たない危機が訪れていた。



写真1 伊豆月ヶ瀬梅林の風景

平成13年に、この状況を憂えた梅組合の組合員が立ち上がった。その年、天城湯ヶ島町の役場を退職した梅原宏生氏が組合長になり、梅林を「中長期計画」に基づいた経営に切り替えていくという方針が打ち出された。今までの梅組合は、毎年梅が収穫できていればそれでいいという感覚的な経営であったが、そこに、経営的な感覚と観光資源としての梅林という新たな視点を持ち込んだのである。そして、東京から故郷に戻った久保田進也氏（現、梅組合の顧問）が、疲弊化する我が故郷を見て、「何とかせねば」「何かしたい」と強く思い、月ヶ瀬区に行く末を握る鍵は、梅林にあると確信して、梅林を地域活性化の起爆剤にしようと考え、この「中長期計画」を実際に作成したのである。

#### イ 中長期計画を策定

しかし、東京戻りの異文化に染まったよそ者が「中長期計画を作りたい」と話をしても誰も最初は見向きもしてくれなかった。自分たちは50年も梅林を守ってきたという自負があったからである。しかし、粘り強く話を続けるうちに、「やらせまい」から「しょうがない」に変化し、若い人の中には、大きな夢に向かう計画にやりがいを感じ、賛同する者も現れた。

この若い人の推進力が大きな力となり、久保田氏と若い組合員3人が中心となって、中長期計画を策定する準備を始め、3ヶ月かけて素案ができあがった。素案は、全組合員に周知され、強く反対する組合員に対しては、自宅に訪問して説明、意見聴取を行うということが繰り返され、平成14年度の総会でようやく承認されるに至った。計画には、5年間の収益拡大、さらには10年後の夢として、自分たちの梅林を生産梅林から

観光梅林に変え、熱海梅園に負けない伊豆一番の梅公園を作ろうという具体的な目標が掲げられた。また、前に進み続けるために、観光誘客10万人とした高い目標を掲げた。さらに、組合員が同じ夢を追いかけるために、「夢語り 実現しよう 梅の里」のキャッチフレーズを公募により採用した。また、梅組合のマークには、月ヶ瀬の月と梅林、それにツボミが添えられ、ツボミには、いつか花咲く日を心待ちにしている、そんな組合員の思いが込められている。

## ウ 「月ヶ瀬の夢」に追い風

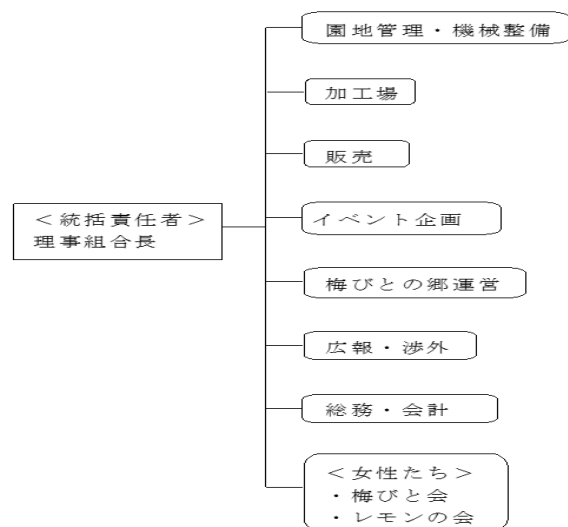
梅林は、道も狭く未整備の状況であったが、「中長期計画」を策定した頃、当時の天城湯ヶ島町が県営中山間地域総合整備事業の採択にあたり募集した提案の中で、月ヶ瀬区から提案した、生産梅林から観光梅林への飛躍をテーマにした「月ヶ瀬の夢」が高く評価され、梅林の公園化を核にした地域活性化が事業化された。事業は平成16年に始まり、農道を大型バスにも対応できるよう改良・拡幅し、駐車場も新設された。梅林内には耕作道の遊歩道化、展望施設の設置等のほか、農産物・特産物の販売や農業体験、加工体験ができる活性化施設「梅びとの郷」や「梅びとの丘」が整備され、観光梅林への素地が整った。

## (2) むらづくりの推進体制

### ア 農事組合法人伊豆月ヶ瀬梅組合

梅組合の前身は、昭和44年に設立された「天城湯ヶ島町わさび梅生産組合」で、平成2年には、業務が梅に集約され「天城湯ヶ島町梅生産組合」に名称を変更し、平成16年に現在の名称となった。梅組合の組合員は現在52名、組合長1名、理事9名（組合長を含む）、監事2名で運営している。組合員は、梅林内の園地管理、加工品の製造、販売のほか、梅祭りなどのイベントの企画・運営も行っている。

第2図 組織図



### イ 女性たちの新たな挑戦「梅びと会」と「レモンの会」

平成21年に、梅組合の女性約30人が立ち上がり「梅びと会」を結成し、月ヶ瀬の逸品づくりや梅を活用した新商品開発料理会を開催するとともに

に、惣菜を作って販売するなど地域の支えとなっている。また、「梅びと会」から新たに生まれた「レモンの会」では、定期的にお弁当とお惣菜を作って直売所などで販売し、自宅ではなかなか揚げ物ができない一人暮らしのお年寄りに好評である。



写真2 女性たちによる梅加工品の検討

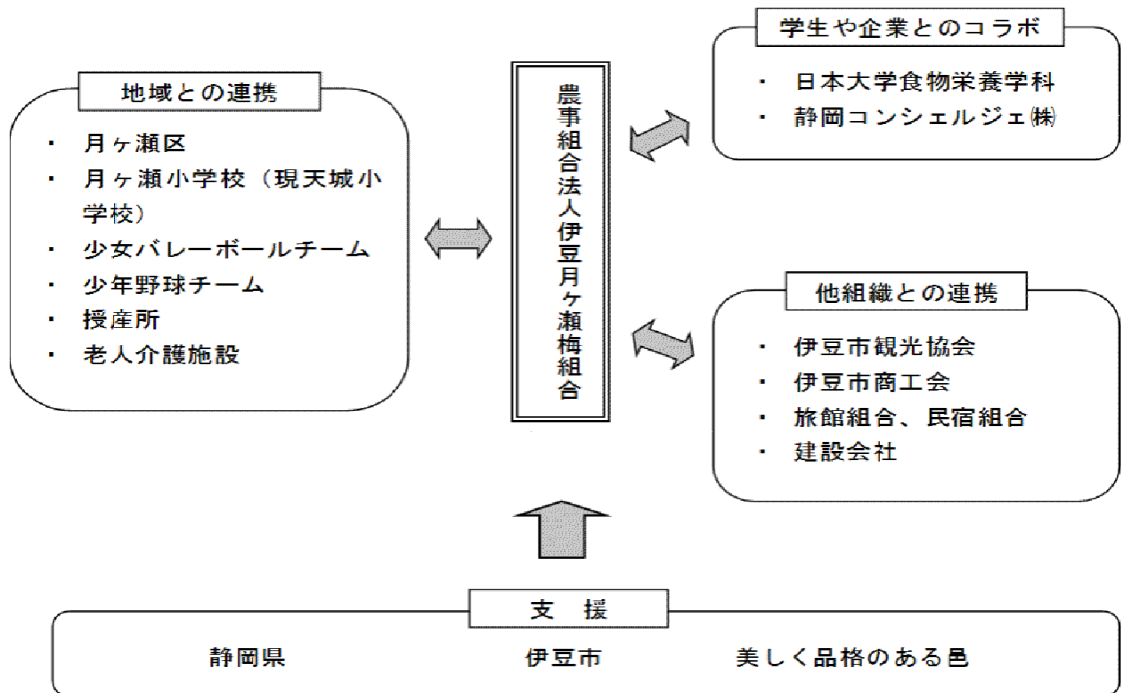
#### ウ 「一社一村しずおか運動」の取組による学生や企業とのコラボ

平成20年から「梅を活用した地域振興」を目的として、日本大学食物栄養学科の学生、教員とともにプロジェクトチームを編成し、商品開発・成分分析を行っている。具体的には、品種別の梅シロップの色、にっおいのデータを分析し、シロップとしての最適な混合比率を検討する等、年1回組合で発表会を開催している。また、同大学とは相互のイベントに出展し合うなど連携の幅を広げている。さらに、広告デザイン会社であるアイドマ企画(株)（現在の静岡コンシェルジュ(株)）とのコラボによる商標、看板、ロゴデザインの作成により、統一感のあるブランドイメージを作り上げている。これは、若い人の感性や外からの意見を取り入れたいとの思いから始まったもので、静岡県の「一社一村しずおか運動」にも認められ、平成22年にはパートナー協定の締結に至った。

#### エ 美しく品格のある邑

平成24年には、地域の宝（資源）を大切に守り、次世代につなげていく取組を行っている農山漁村を県が認定する「ふじのくに美しく品格のある邑」に「伊豆月ヶ瀬梅の里」が登録された。翌年には、その活動が評価され県知事顕彰を受け、梅林の知名度もあがり、地域住民に梅林に対する誇りと、いっそうの愛着心が生まれ、地域住民の結束力を強める結果となった。

第3図 むらづくり推進体制図



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

「梅びとの郷」や地域住民向けのイベントを中心に、地域住民が集い憩う場を提供するとともに、梅林での梅まつり等を通じた都市との交流による地域の活性化が図られており、組合が中心となった新たなむらづくりが実現している。

### 2. 農業生産面における特徴

#### (1) 梅へのこだわりと収量拡大への取組

梅組合は、実の充実したきれいな梅を作ることに非常に気を使っており、病虫害防除は丁寧に行い、剪定も、人によってばらつきが出ないように毎年講習会を開いている。また、化学肥料はなるべく使わず、鶏糞を中心とした有機肥料にこだわっている。さらに、生産量の増大のため、毎年継続的に苗を植え新しい木を増やしており、梅の生産量は、平成18年の7.7tに対し、平成27年は11.6tと少しずつであるが増えてきており、今後更なる収量の拡大が期待される。

#### (2) 鳥獣害防止柵を住民自らの手で

梅組合では、毎年新しい苗を植えているが、以前は鹿による食害に頭を悩まされ、電気柵、魚網などによる侵入防止策を講じても効果がなく、幹まで食べられた苗は枯れ、掛けた費用がすべて無駄になることが繰り返さ



れていた。平成18年に、中山間地域総合整備事業の一環として、梅林を一周する約1,500mの防止柵を組合員の手により設置された。延べ100人余の組合員が知恵と力を集結して施工した防止柵は、その出来も素晴らしく、県内関係者が視察に来るほどのものであった。設置後は、鹿の侵入が止まり、ようやく安心して新しい苗を植え育てることができるようになった。

### (3) 農業者の意識を変える

「梅びとの郷」では、梅やその加工品を売るだけでなく、開所した平成21年から、朝市を開催しており、それが農業者の意識を変えるものとなっている。近所に配っていた農業者にとっては、新たな収入源となるだけでなく、自分たちの作物を買ってくれるお客さんの顔が見えることから、地元にはかない野菜の生産や農産加工品づくりへのチャレンジにつながっている。また、遊休農地を利用した新たな野菜作りも始まっている。



写真3 梅びとの郷での朝市

### (4) 観光梅林としての整備に知恵と力を出し合う

訪れる人が楽しめる伊豆一番の梅公園とするため、「生産用の白梅に加え、紅梅やピンク梅、しだれ梅を植樹し、花の色も賑やかにしよう」「天城山の間伐材を使ってベンチをつくろう」「近くにある竹林の竹を作って竹垣を作ろう」と、組合員を中心に地域住民が知恵と力を出し合って整備を進めた。また、梅まつり開催中には、スタンプラリー、フォトコンテスト、地元野菜の直売、地元特産物の紹介販売、日本舞踊、アマチュアバンドの演奏、大道芸など数々のイベントを独自に企画・運営している。特に、平成20年からは、静岡県太鼓連盟に加盟しているチームが一同に集まって競演する新たな試みとして、「静岡県太鼓祭り」が同会場にて開催され、3日間で24チームが演奏する壮大なイベントへと発展している。



写真4 梅まつりでのステージイベント

### (5) 月ヶ瀬ブランドの浸透

かつて生産梅林としての「伊豆月ヶ瀬梅林」の名は、今や観光マップにも掲載される観光梅林へと成長した。今後、梅組合が目指すものは、月ヶ瀬ブランドの浸透である。自分たちが栽培した梅だから、加工品にもこだわりたいとの思いから、栽培から加工に至るまで組合員の手で行い、添加物を一切加えない昔ながらの製法にこだわる。特に、昭和52年から製造している梅シロップは、30年来その製法を変えず、梅と砂糖だけで作られ、今では8 tの梅を使い2万本を製造する看板商品となっている。添加物を加えないため、地元幼稚園の給食や地元旅館のウェルカムドリンクとして使われるほか、最近ではインターネットを通じた注文も増えている。また、加工場での梅干しやジャム作りでは、女性が指導的な立場となり、試作品の開発や販売方法、ポップ作り等、女性ならではのアイデアや知恵が活かされている。現在、梅林の商品をPRするため、県外を含め年間10数回の商談会やイベントに出展して、月ヶ瀬ブランドを広めている。

### (6) 財務体質の健全化に向けて

10年ほど前の梅組合の財務状況は、未払金が2千万円、さらに、資本金16百万円に対する欠損金が1千万円を超え、このままでは欠損金が資本金を超える事態となり、新たな事業に取り組むことは不可能であった。そんな状況に危機感を感じ、この財務体質の健全化に向けた取組を中長期計画に掲げた。まずは貸借対照表や損益計算書が示す組合の状況を、組合員が理解するところから始め、次に、感覚に頼った経営を排除し、費用の支払いを一つ一つ徹底的に見直すことで、徐々に決算を黒字化し、それを利益準備金として積み上げていくことが可能になった。現在は、欠損金という言葉は消え、代わりに資本剰余金、利益剰余金などの言葉が並ぶようになり、売掛金や製品といった資産が増えている。財務体質の健全化によって事業拡大が可能となり、最近では金融機関から無担保融資を取り付けるにまで至っている。

## 3. 生活・環境整備面における特徴

### (1) 交流人口の増加

ただ梅を観賞するだけの1週間ほどのお祭りだった月ヶ瀬梅まつりは、イベントを含む3週間のお祭りへと成長し、来場者も平成22年の4,012人から、平成27年には7,816人へと着実に増え、月ヶ瀬区の大イベントとなっている。梅林内には、しだれ梅や、紅、桃、



写真5 保育園児招待による梅狩り

白など色鮮やかな梅の木が植えられ、遠景に連なる天城山と、眼下に見下ろす梅の花が、天空の楽園にいるような気分させる。そのほか、6月の梅収穫期には「観光梅狩り」、10月には「十三夜お月見コンサート」など、多くの趣向を凝らしたイベントにより、年間をとおして梅林の魅力を発信している。

## (2) 未来を担う子どもたちの夢を乗せて

梅林内の一番高いところに位置する天城連山展望の丘には、景色を一望できる展望デッキが設けられ、観光客や地域住民の憩いの場になっている。そこには、小学生チームを対象にしたバレーボール大会「梅カップ大会」の参加チームが毎年、表彰式にタイムカプセルを埋めている。第1回に埋めたタイムカプセルは今から8年前で、子どもたちが梅林に託した夢は、20歳になった青年たちの手によって今年開封された。梅組合は、このほかにも、少年少女バレーボール大会、野球大会への梅カップの提供、小学生や保育園児の梅もぎ体験、小学生俳句大会、記念植樹など地域の子どもたちを対象にしたイベントの開催や支援を通じて、その成長を見守っている。



写真6 伊豆月ヶ瀬梅林での  
タイムカプセルの開封式

梅組合は、このほかにも、少年少女バレーボール大会、野球大会への梅カップの提供、小学生や保育園児の梅もぎ体験、小学生俳句大会、記念植樹など地域の子どもたちを対象にしたイベントの開催や支援を通じて、その成長を見守っている。

## (3) 地域住民のための地域活性化を目指して

梅組合は、地域住民の交流や連携を促進するため、月ヶ瀬区主催で開催される「敬老感謝祭」や「区民ウォーキングとバーベキューの会」において中心的な役割を担っている。また、梅まつり開催中には、地域感謝デーとして区民を招待する日を設け、カラオケ大会、踊り、手品、チェーンソーアートを披露するなど、区民70～80人が参加するイベントにもなっている。

このような取組によって、月ヶ瀬区民同士の理解も進み、住民自ら地域づくりに関わろうという気持ちが生まれてきている。今後のさらなる発展のため、活動範囲を旧月ヶ瀬小学校区の5地区（月ヶ瀬、矢熊、田沢、門野原、吉奈）に広げることも視野に入れ、現在、組合員参加資格を5地区へ拡大し、梅林の管理作業や農産物直売所の集荷等の幅を広げるとともに、5地区を回るウォーキングルートを設定し、お互いに交流できるイベントを開催するという、地域全体の活性化計画を作成中である。